

〔一〕昭和四年二月五日、十日町新聞に発表されたもの。

① 城壁名物 かずかずあれど

白石もちみに、雪の肌
薄たらの放せぬ味のため

*テモハツテモ ソジャナイカ
テモ ソジャナイカ
(※以下繰り返し送す)

② 姫ごかりを なじよして暮らす
雪に埋れて 機仕事

花の咲く陣じゃ 小半年

③ 窓にさらさら 粉雪の音を
聞いて眠れぬ 夜もすがら

やるせないぞや 雪明かり

④ 人が見たらば 獲丁へよけて
雪のトンネル 覗れ場所

恋のぬけ道 まわり道

⑤ 雪が消えれば 越路の春は
袖も故も 膝間く

わしがらの 花も咲く

⑥ 屋根の雪なら 下ろしちもコリまが
恋の重荷を 何こしよつ

私じゃ苦勞が 増すばかり

⑦ 玉の汗にも ちぢまぬ明石
濡れば透きます 雪の肌
本場越後の 十日町

〔二〕昭和四年二月十五日、十日町新聞に追加されたもの。

⑧ 雪の夜がたり 圓伊裏に更けて
薄しともない 人がある

ままよ槽もなるら 一二文

⑨ 汽車を止めるよな 吹雪の中も
止めて止まらぬ 恋の道

想いつめれば 一筋丁

⑩ 影は紫 夜明けの色の
湧れりや 輝く 顔世界

雪に野山の 厚化粧

〔三〕昭和四年六月、山野楽器店発行の楽譜に追加されたもの。

⑪ 雪の小半 開出した空を
開けのちまき立つ 春の歌

小鳥のかりに 任まりよか

⑫ 逢いはばなだが 十日町で
霞空の心の 往來降り

涙が涙が 夜を更かす

⑬ 雪が卑いか 越路の紅葉
色も薄くなる 初めから
悪い染めたか 無理かいな

〔四〕昭和二十七年、白任「心のふるさと」に追加されたもの。

⑭ 桐を育てりや 嫁入準備
懐えて楽しむ 花ざかり

娘ざかりも 直きに来る

⑮ 山と山との 谷あいなれば
月は遅う出て 早う落ちる

語り語るなら 早うこざれ

⑯ おいでましたか 谷街道を
夏は若葉の 青あらし

秋は紅葉の 綾にしき

⑰ 月の小窓に 晩の母を
思い浮べりや 雁の声

夜機織る 娘は袖しぐれ

〔五〕昭和三十年頃、ビクターレコードの歌詞カードに追加されたもの。

⑱ 秋の朝めは 八雲の紅葉
帯えて染めます 谷の水

襟の心の 色見たや